

展觀（九時—四時於會議室）を行ふ。  
一時より講堂に於て學長導師の下に法要、續いて左の講演あり。

一、頼山陽と雲華 大阪市立大學 神田喜一郎教授  
一、雲華院の行蹟を偲びて 本學 日下無倫教授

講演終了後茶話會を開催、當日は内外多數の參列を得て頗る盛會であつた。

(二) 論文發表會

二月九日（木）三時 於第八教室

卒業生諸君の論文についての發表あり。

出席者 日下、名畑教授、龜淵助手、北西副手、細川先輩、

學生十三名。

引續き七時より大谷派山科別院に於て卒業生送別會

を開催す。

（堀尾記）

東洋史學會支那學會

○中國文化同好會第十七回例會 昭和二十四年十二月十五日

於會議室

公開講演

「中國古代の宗教」

京都大學人文科學研究所長 貝塚茂樹氏

○第十八回例會 昭和二十五年二月十八日 於黎明會館

卒業論文發表會並豫餞會

先づ支那學專攻四君の卒業論文の發表があつた。論題

莊子の思想とその諸家との交渉

藤支澄道

李屏山の傳とその思想

赤松專

今古奇觀の研究

館昭

白樂天の思想と文學の交渉について

堂谷至曉

次いで神田講師と木村講師が論文の批評と中國學の所感を述べられ、記念撮影の後、豫餞會に移る。出席者は二講師の他に宮崎講師及び本學の野上部長、中田助教授、水谷豫科教授、畑中助手、察見副手、卒業生の大屋學士、間野學士、學生の東洋史學專攻、大野、太田、近藤、名畑、支那學專攻、多屋、米田、垣内、北村、坂田、宮尾、宮城の諸氏。本會としては近年稀な盛會。歡談諷吟時を過し、和氣霽々裡に散會した。

中國古代の宗教

京大人文科學  
研究所長文庫

貝塚茂樹氏

中國古代の宗教思想について私の考へを述べるのであるが、こゝに宗教といふのは儒教のことを指して言ふのである。儒教を宗教と言つてよいかどうかは別問題とする。こゝに私の述べようとする古代の宗教思想は儒教の起源と非常に深い關係があるものである。そこで、先づ儒教は中國の思想としてどういふものであるかと言ふことから述べよう。

儒教が古代の宗教から獨立して學問となつたのは、大體BC六〇〇年頃であるが、この頃の儒教は漠然としてゐて、組織もなければ教團もなかつた。即ち、社會的信仰宗教と言ふべきも

のであつた。この當時は、社會、宗教、文化、學問が渾然として一つになつてゐた時代であつて、この時代において孔子の學術の源泉となつてゐたのは社會的慣習であり、儒教といふのはこれに束縛を受けた一般信仰としての宗教であつた。この儒教の起源が一體何處に在るかといふことを考へるに當つては、先づ古代の原始的宗教について考察しなければならぬのである。これについての私の考へは、私の著書「中國古代史學の發展」の中の所々にも書いておいたのであるが、今それをまとめて述べて見よう。さて、こゝで殷と周の二時代の思想を比較するに當つて、殷代の宗教思想を窺ふ資料としては、甲骨文字と卜辭とがある。これに對して周代特に西周時代の資料としては書經、詩經、易經、金文がある。夏殷周三代の思想は、後に禮を中心とした學問となるのであり、孔子も三代の禮について述べてゐることは今更言ふまでもない。この二時代の思想を比較するにも、この禮を中心にしなければならぬ。それではこの禮といふものについては儒教ではどのやうに考へてゐたかを検討して見るに、禮記の表記の中に、「殷人は神を尊び、民を率ゐて以つて神に事へ、鬼を先にして、禮を後にする」といひ、又、「周人は禮を尊び、施を尚び、鬼に事へ、神を敬して之を遠ざく」といふ。これによると殷人と周人とにおいてはその神に對する考へ方が全く相違してゐることがわかる。殷人は祖先の靈が實存してゐることを信じて、祖先の靈に事へる禮を疎略にしてゐるが、周人は神を尊ぶ禮を先にして、神に對する祭禮を重んじてゐる。この相違はつまり祖先の實存を信ずるか否か

にかゝつてゐる。

この事情は甲骨文字が出て來てから一層明瞭になつてきた。即ち、殷の都の遺跡であつた河南の安陽から發掘された龜甲は、その當時卜ひに用ゐられたもので、その發掘された数は數萬あつたと言はれる。これは殷代の後半期、武丁王の時から二百年の間において民間に用ゐられてゐたもので、これを用ひて對外關係や、雨や豐凶を卜つたものである。現代においては政治問題とか宗教問題の起つた場合は勿論閣議によつて決められるのであるが、當時にあつては、卜ひによつて神の意志に従つたものである。この場合、神といふのは上帝又は天帝を謂ふのである。たゞこれについては上帝の他に祖先神があつたと言はれるが、祖先神が上帝とどういふ關係にあつたか、上帝を祖先神の中へ入れてゐたかどうかは卜辭ではよくわからない。たゞ上帝の意志を卜ひによつて聞いたことだけは確かである。

殷には多くの神々があり、上帝は祖先神を總稱するものであつた。これはギリソヤの神とは相違してゐる。雨や戰爭は上帝が支配するが、豐凶は又他の神が支配すると考へてゐた。いわば多神であつた。そして祖先神の中で特定の優越した神を上帝としたのである。だから多神教であると同時に亦一神教の傾向があつた。自然界のこと、日々の事柄等も、すべて神の意志によつて決定するものであり、祖先の靈によつて支配されるものと信じてゐた。思想的に言へばこれは天命論の立場に在つたと考へられる。

これに對して、周人は鬼本主義、人本主義といふ語で表はさ

れると思はれる。殷人は神を非常に大切に考へたが、周人は誠意をもつて鬼神天帝を祭ることを最大の任務であるとし、祭禮を重くすることによつて神の意志は變るものとしたのである。この點は殷人とはかなり相違してゐる。

このやうな對立のできたのは、實は社會の自然發展によるものであるが、この對立をもつともよく窺ふことができるのは周公、召公、成王の時代である。尙書の召誥、洛誥は五誥の中の最古のものと言はれる。この文は西周の金文に類似してゐるところがあり、卜辭や金文の研究が進んでくるとともに、これが多少不明な點はあるが周初の言葉をそのまま傳へたものであることが明らかになつてきた。この二誥は、周公と召公が天下を統一して、今の洛陽に都を定めた時、卜ひの結果によつて天下の計を立てて天子に奉つたものである。この卜ひの言葉の中に、新しく王朝を立てた成王に對する訓戒の言葉がある。その言葉に「嗚呼、生子の若く、その初生に在らざるなし、自ら哲命を貽す。今、天、其れ哲を命じ、吉凶を命じ、歷年を命ずる、今、我が初服を知らん」とあり、天が王に三命を興へたことを述べてゐる。第一に赤子が成人するかどうか、第二に吉か凶か、第三に長命であるかどうか、これは一に王が新しい朝の初めに當つて徳を敬ふことの如何に在るといふ。これは殷人の天命論に對して周公の時になつてはじめて新しい思想が生れてきたものと見られる。これは神に對して人間の自由が多少ながら確立されたことになる。徳を修めることによつて天命を動かすことができるといふ思想は、當時としては實に大きな變革であり、周

公の思想の大きさがこゝにうかがはれる。この革命的な思想がそのまゝ傳へられて尙書、詩經となり、これを完成したのが孔子である。孔子は天命について考へるとき、徳を重く見て、神からの解放、人間の人文主義を人爲的に確保することを考へた。このやうに宗教的生活から現世的生活を確立すること、即ち、宗教から人間の倫理性を確立することを考へたのである。

この孔子の考へが、孔子以前において、周公、召公のやうな偉大な人物によつて、始められたのであるところに儒教の起源が考へられる。中國ではこの召誥、洛誥にある立場を性命論と稱してゐる。

西洋においてもこの方面の研究が行はれてをり、この二つの立場を決定論、自由論といふ言葉で言ひ現はしてゐる。孔子を新しく見直した人としては最近ではシカゴ大學教授で、私とほゞ同じ頃に中國に留學して、中國の學問のよい所をアメリカに持つて歸つた Creel といふ人がある。この人が龜甲卜辭を研究した著書に *Birth of China* (1937) があり、最近又 *Confucius, The man and the myth* (1949) 等があり、儒教をこゝに新に研究を發表してゐる。(責在記者)